久下貞三

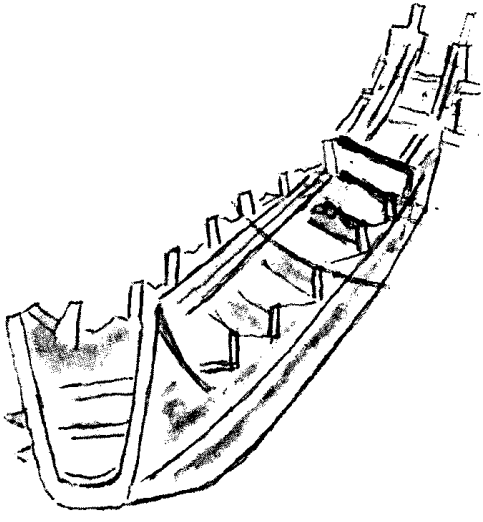
万葉集相模風土考

東歌考・防人解析篇

久下貞三

万葉集相模風土考

東歌考・防人解析篇



彩流社

《著者略歴》

久下 貞三（本名・鈴木貞治）

1908年　茨城県下館市に生る

小山内薫に師事

土屋文明門下アララギ会員を経て

現在歌誌「山谷」同人

文芸首都同人を経て「海塔」同人

「文芸モリキュール」発行

神奈川県万葉歌跡研究の会

著　書　『戦争の谷間にかりそめの平和がありて』

現住所　〒230 横浜市鶴見区梶山 1—7—7

万葉集相模風土考——東歌考・防人解析篇——

1985年6月30日　印刷
1985年7月10日　発行

定価 2,500円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著者　久下貞三
発行者　竹内淳夫

発行所　株式会社　彩流社

〒102　東京都千代田区富士見2—2—2
電話 03(234)5931 振替・東京9—55239

印刷　明山印刷＋清美印刷
製本　(有)青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　1091—921—2900

目次／万葉集相模風土考

東歌考

1 序……10
2 万葉集成立年代の背景——橘諸兄の生年より大伴家持の没年まで——……11
3 東の国の相模……20
4 相模国より神奈川県へ……23
5 足柄山と船材……25
　鳥総立て足柄山に船樹伐り材に伐り帰りつあたら船木を
6 古代と海洋……30
7 足柄の鶴……32
　足柄の箱根飛び越え行く鶴(たづ)の乏しき見れば大和し思ほゆ
8 足柄は恐ろしい神の棲む山……33
　小垣内(をかきつ)の麻を引き干し妹なねが作り着せけむ白たへの……
9 相模国の国府は東国の玄関……37
10 常陸風土記と東歌……40
11 相模の国府の浜……43

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

相模路の淘綾の浜の愛児なす児等は愛しく思はるるかも

12 足柄のラブソング……45

足柄の彼而此面に刺す畏のかなる間しつみ児ろ我紐解く

13 武蔵嶺と相模嶺……52

相模峯の小峯見過ぐし忘れ来る妹が名呼びて吾を哭し泣くな

武蔵峯の小峯見かくし忘れゆく君が名かけて吾を哭し泣くる

14 夫の帰還を待つ足柄の若妻……56

わが背子を大和へ遣りて待つ日足す足柄山の杉の木の間か

15 夫の帰るまでの自給農……59

足柄の箱根の山に粟蒔きて実とはなれるを逢はなくも怪し

足柄の箱根の山に蔓ふ葛を引かば依り来ね下なほなほに

16 鎌倉海岸の恋のささやき……62

鎌倉の見越の埼の石崩の君が悔ゆべき心は持たじ

17 鎌倉海岸の逢引き……64

ま愛しみさ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満つらむか

18 足柄小舟の船路……68

百津島足柄小舟歩き多み目こそ疎るらめ心は燃へど

19 土肥処女の情のぬくもり……70
足柄の土肥の河内に出づる湯の夜にも頼らに児ろが言はなくに
20 可愛い彼女の手枕……72
足柄の摩萬の小菅の菅枕何か枕かさむ児ろせ手枕
21 しばし離れる妻……76
足柄の箱根の嶺ろの和草の放つ妻なれや紐解かず寝む
22 うわさに認められて……79
足柄のみ坂かしこみ陰り夜の吾が下延へを言出づるかも
23 足柄谷の造船……82
足柄の秋成の山に引こ船の尻曳かしもよ此処は漕難に
24 孤独な私を口説いて欲しい……85
足柄の吾を賭け山の殻の木の我を誘惑さねも且つ咲かずとも
25 薪樵りに逢引に……88
薪樵る鎌倉山の木垂る木をまつと汝が言はば恋ひつつやあらむ
26 旅の土産は恋煩い……91
芝付の三浦埼なる根都古草相見ずあらば我恋ひめやも
27 橘樹郡橘郷……92

橘の蚕場のはなりが思ふなむ心美くしいで吾は行かな
多摩川に曝す手作りさらさらに何ぞこの児の許多愛しき

防人解析篇

1 東国民と防人……108
2 歌詠み防人の身分……110
3 丁考（防人の階級）……114
4 防人を送り出した相模守は帝王の甥、従兄、義父、祖父、大叔父……125
5 「大君の御言恐こみ」考……129
大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母を置きて
6 防人の家職 (一) 丈部……136
7 防人の家職 (二) 丹比部……138
八十国の難波に集ひ船飾り我がせむ日ろを見も人もかむ
8 防人の家職 (三) 丸子部……143
難波津に装ひ装ひて今日の日や出でて罷らむ見る母なしに

9 防人の家職 (四) 倭文部……147
足柄のみ坂た廻り顧みず吾は越え行く……
10 防人の家職 (五) 物 部……151
色深く夫なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む
家ろには葦火焚けども住みよけを筑紫に到りて恋しけはも
11 防人の家職 (六) 大伴部……155
12 防人の家職 (七) 刑 部……159
13 防人の家職 (八) 舎人部……161
14 防人の家職 (九) 帰化人の品部……166
15 防人の家職 (十) 麻績部……174
16 防人の家職 (十一) 椋椅部……180
草枕旅の丸寝の紐絶えば我が手とつけろこれの針持し
赤駒を山野に放し捕り兼にて多摩の横山歩ゆか遣らむ
17 防人の家職 (十二) 服 部……189
我が行の息衝くしかば足柄の峯這ほ雲を見ととゆばね
我が夫を筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かななあやにかも寝も
18 防人の家職 (十三) 神祇官の民部……193

中臣部　忌部　占部

19 防人の家職 (四) 春日部……198
20 防人の家職 (五) 藤原部……200
足柄のみ坂に立して袖振らば家なる妹は清に見もかも
21 防人の家職 (六) 私部……202
22 防人の家職 (七) 玉作部……206
23 防人の家職 (八) 其他の民部……208
上毛野牛甘／大田部／他田部／有度部／若倭部／生玉部／生部
坂田部／商長／日下部／今奉部／雀部／小長谷部
24 神のみ坂……218
25 足柄の八重山……220
足柄の八重山越えて往ましなば誰をか君と見つつ偲ばむ
26 東国の防人と家持……226
27 その後の家持……233
28 橘奈良麻呂事変の後……237
29 遺骨となってから流刑……243
30 万葉集成立に関する政治的な背景……248

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

東歌考

1　序

紀元三〇〇年代より七五八年までの数世紀の期間に詠まれた歌を集めた万葉集の中から、誰かが常に取り上げている天皇の歌とか、貴族たちの歌と言った知識階層の人々の遺した領域とは異なる、現在の神奈川県の区域内の先住者らの遺した作品、又は旅人が人情や風物に接して詠んだと思える作品を選り抜き、今まで多くの学者や研究家が「いまだ詳かならず」と、作者に就いても、歌のもつ社会性に就いても突き放して来た領域に独自な角度から踏み入って、可能な範囲だけなりと掘り起して見ようと思う。

万葉集の相模国の歌は、数少い旅人の作品のほかに、巻十四の東歌の中の一連の作品と、巻二十の防人歌の中の三首で、合せて三十二首を数えうるだけである。十四、二十の両巻には、当時の大和朝廷の内部の人々から、東の国と呼ばれた関東と以北の国々の歌が盛られている。詠み人は農漁民やその地の住民たちで、地方地方の方言や訛りや、俚言までが使われていて、古代の言葉や、庶民の人情風習などを研究するに、貴重な資料の宝庫と見なされている。

因みにここでは、相模国の作品を研究し鑑賞し、作者の歓びや悲しみを通じて、彼らの社会的な地位や身分を解きあかすことによって、受けていた待遇や、歌の成立した背景をも探ぐって見たいのである。歌詞を解釈して共感を引出すだけでは、千二百年以上の古代社会に生きた作者たちの、

低辺階層からの真の息吹きに接することはできないだろう。研究者それぞれが、まちまちな憶測説を作っていくことになるわけである。

特に防人歌の詠み人達は、各々に所属した職業集団の民部を名乗っていることは貴重な資料である。それらは世襲の家職名で、作者らの生活と関わっていた仕事の内容も察せられる。しかし防人の中には、朝廷傘下の豪族や部族の首長家の若者もいて、朝廷から下賜された姓と家職を持ち、官号を持つ者もいる。官号を持つ者には位階が授けられていた筈である。防人歌の詠み人たちを、名もない下層民ばかりと片付けることは出来ないわけである。研究考証には、相模国の表題に捉われることなく、広く東国各地の作品が参考となることであろう。

2　万葉集成立年代の背景——橘諸兄の生年より大伴家持の没年まで——

東国各地から選り集めた歌を盛った巻十四の東歌は、古代の農村や漁村に生活した人々の息吹きを、粉飾することなく伝えた異色の歌集で、他の巻とは異った選歌と編集がなされている。その巻だけは編集者がちがうのだろう、と言う考え方と共に、方言や訛りを含んだまま唄いつがれ、磨かれて来た各地の民謡であったろう、と考証する研究が多いようである。

巻二十の防人の歌は、東歌とちがって詠み人も、詠み人の生活していた地域や、職業集団までが記載されているので、より身近かな感じのする人の歌として受入れることができる。舟乗りがいる。

機織りの部落の夫婦の歌がある。工作の職人も、下級の地方官もいる。それらの班長級の人もいる。中には、国守（くにのかみ）の何倍かの経済力をもつほどの豪族にして、郡長（こおりおさ）家の青少年も歌を詠んでいる。

皇族や貴族の歌ばかりでなく、東歌や防人の歌を含めた万葉集は、橘諸兄の命を受けた大伴家持が、年月をかけて編集したと言われているので、諸兄と家持の生存した飛鳥時代末期から大和年代の後半までの期間、共に朝廷の文化的な事業に携ったり、政治に参与して活躍したりした朝廷関係者の年代譜を書き抜いて、この研究を進めるうえでの、参照表にすることにする。

六八四年（天武7）葛城王（後の橘諸兄）敏達帝五世の孫として生る。父美努王、母橘三千代。

六九四年（持統8）都を飛鳥より、大和三山（香具 畝傍 耳成）に囲まれた平野地の藤原京に遷す。

藤原馬飼（後に宇合（うまかい））大織官鎌足の孫として生る。父は後の右大臣不比等。

七〇一年（文武 大宝1）聖武、不比等の娘宮子を母として生る。

藤原光明子（後の光明皇后）生る。父不比等、母は橘三千代。

七〇八年（元明 和銅1）始めて貨幣を鋳造。

七一〇年（元明 和銅3）平城京（奈良）に遷都。

武蔵国が始めて国書に記載される。

七一二年（元明 和銅5）古事記成立。

七一三年（元明 和銅6）風土記撰上の詔勅。

七一六年（元正　霊亀2）武蔵国に高麗郡を設置。

馬飼遣唐副史となり、名を宇合と改字。留学生吉備真備、阿部仲麻呂を伴って唐に渡る。

――後年、真備は諸兄政権のブレーンとして活躍するが、仲麻呂は帰国船が遭難し、かの地にとどまり、唐朝に仕官して詩人の李白らと親交をもつ。「天の原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山に出でし月かも」と、故国に思いをはせながら異郷の土となる。

七一八年（元正　養老2）聖武立太子。光明子皇太子妃となり後の孝謙を生む。聖武の生母は宇合ら藤原四卿の妹、光明子は母を違えた妹。橘諸兄は光明子と父を異にした兄、交錯した血縁政権の基礎の芽生えとなった年である。

大伴家持大納言旅人を父として生る。

宇合、唐から帰国して常陸の国守に任官。国府の支配下に歌人の高橋虫麻呂が在任していた。連の姓を賜っていた虫麻呂は郡司の一等官であったろう、と思える。

藤原不比等、主班となり国家の根本法典となる養老律令を制定。

七二〇年（元正　養老4）日本書紀成る。不比等死す。天武帝孫（父高市皇子）長屋王が政治の中枢に勢力を増す。

七二三年（元正　養老7）宇合、国守五年の任期を終えて式部卿に転任。大方は親王の勤めた長官で、礼式、叙位、賜禄などを司り、大学寮を支配。

七二四年（元正　養老8）聖武帝即位、伴って光明子は夫人となる。

陸奥農民の叛乱に国守佐伯児屋麻呂が殺害され、ために蝦夷地（東北地方）の前線拠点として多賀城（宮城県）を設置。宇合が持節大将軍として鎮圧に赴任する。

七二九年（聖武　天平1）常陸風土記成る。

首班の左大臣長屋王、無実の謀叛罪を被せられて、宇合の率いた軍団に包囲された自邸内で、妃の内親王と共に自決して果てる。

事変後天皇践祚し、臣籍からの立后反対者の長屋王が亡くなったため、光明子夫人は史上始めて臣下から皇后となる。

七三〇年（聖武　天平2）左大弁葛城王、臣籍に降下して母方の橘を継ぎ、橘宿禰諸兄となる。

――左大弁は、中務、治部、民部、式部等を支配した長官。

奈良の薬師寺東塔建立。

光明皇后、人民の飢餓と病災を救うために悲田院と施薬院を作る。

この年以後、防人の全国よりの徴集を中止し、東国の若者だけを狩り出すことにする。兵期は三年。

七三一年（聖武　天平3）諸兄参議となる。

七三二年（聖武　天平4）宇合、西海道節度使に任ぜらる。――筑紫へ送り出した防人と軍船を検閲し、軍政を司る長官。言うなれば軍政部長官である。赴任する時に高橋虫麻呂が餞け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com